



典礼委員会担当司祭 菅原友明

### 今月のポイント①

福音朗読後は、

司祭「主のみことば」

会衆「キリストに賛美」

福音朗読前の対話句は、司祭「主は皆さんとともに」、会衆「またあなたとともに」、司祭「○○○による福音」、会衆「主に栄光」となります。「またあなたとともに」は日本への適応に配慮した訳でありラテン語規範版の直訳が「またあなたの霊とともに」であることには留意したいところです（3月号連載第2回参照）。額、口、胸に十字架のしるしをするのはこれまで通りです。朗読後は、司

祭「主のみことば」、会衆「キリストに賛美」となります。現行版では司祭も会衆も「キリストに賛美」と唱えていましたが変更になります。ラテン語規範版では、福音朗読後も第一および第二朗読の時と同じく「Verbum Domini」と唱えることになっていますが、福音朗読後はキリストのことばであることを明確にするために「主のみことば」と訳し、第一および第二朗読後の「神のみことば」と区別されています。

### 今月のポイント②

信仰宣言の「受肉の神秘」を

述べる部分で一同は礼をする

信仰宣言では、ラテン語規範版に従って、キリストの受肉の神秘について述べる部分で、一同が礼をすることが明記されました。「ニケア・コンスタンチノープル信条」を唱える場合には、「聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となられました」の部分で、「使徒信条」を唱える場合には、「主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ」の部分で、一同は礼をします。信仰宣言を歌うときも同様にします。これは

「受肉の神秘において、神の恵みに深い感謝を向ける、ローマ典礼に伝統的な礼拝行為です」(※1)。受肉の神秘については、フランシスコ教皇がこう語られています。「ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1・14)。わたしたちを驚かせてやまないこのことばのうちに、キリスト教のすべてがあります。神はわたしたちと同じように、死すべき弱い者となりました。神は罪を除いてわたしたちの人間的状况を共有しましたが、ご自分のもののように、わたしたちの罪を身に負いました。神はわたしたちの歴史の中に歩み入り、完全な意味でわたしたちとともにおられる神となったのです」(※2)。受肉の神秘という驚嘆すべき神の愛を前にしたとき、人はただ感謝のうちに深く頭を垂れるしかないのです。

※1 カトリック中央協議会「新しい『ミサの式次第と第一』第四奉献文」の変更箇所 30頁

※2 2014年1月5日「お告げの祈り」傍点は筆者